

シンポジウム総合討論



本井：では、最後のプログラムに入ります。シンポジウムと名付けておりますけれども、楽屋話をすれば、このメンバーがそろったのは今が初めてです。何の打ち合わせもしませんので、誰が何をしゃべるか、今日に至るまで分からなかったもので、どういうふうにかみ合えるか、ちょっと心配してるんですけども、ご協力をお願いいたします。シンポジウムというよりはQ&Aの時間にしたいなというのが私の願いですので、フロアから

の質問、これ、活発に出るようにしてください。

まずメンバーの中で、真ん中の大鉢先生、新人です。新人ですので、まず先生にハリス理化学校について数分、コメント、お願いしたいと思います。その後、皆さんからの質問を受けます。



大鉢：じゃあ、私の名前が出てて、びっくりしました。いやいや、ここに出させていただくのは承知してたんですけども、こういう特別席が用意されているとは。

実は森先生からも少しご紹介いただきましたけど、この企画の大学構想ということで、旨意が出て130年の企画を、私も第1部門研究の運営委員の1人でございますので、相談のあったときに、ちょうどそのときは私、欠席しておりました。欠席裁判で、その流れの中でハリス理化学校を取り上げようじゃないかということで話があったのです。森先生と相談して「2人で、じゃあ、やりますか」と言っていたんですけど、森先生が実際に引き受けてくださって、役がご免になったかなと思ってましたら、ここにちょっと顔を出しなさいという

ことで出てまいりました。

私が今回のこのシンポジウムの最初、皆さん、今日、ここに扱われた130年前の旨意がスタートだということでお考えです。新島はもう心の中でのうか、こういったことの具体性はこのときにしか出てませんが、やはりラットランドで聴衆に訴えたときから、頭の中には欧米の教育制度というのですか、立派なれんが造りの、そして、特にアメリカの場合は全寮のところでは勉強を学ぶ。そういった人たちが世の中を運営しているということで、この考え方、この制度、これがどうしても日本に持って帰りたい、と思ったのがスタートです。じゃないかと思えます。

それで、英学校から始められました。第1回の卒業生の中で山崎為徳さん。ものすごく有名なというか、立派な、そして、一番優秀だったと伝え聞いてます。この方を大学の教員として残されて、3人のうちのお1人として。ところが、山崎さん、早く亡くなりました。山崎さんのご専門は、やはりいろいろ調べると理系でありました。

次に目をつけられたのが下村孝太郎さんだったと私は思います。下村孝太郎さんがアメリカで勉強できるように、奨学金なんかの手配もずっと新島先生はなさってたと思います。でも、そういったことはあまり表には出てません。

それから、あと、今回の旨意のときに、新島先生が募金に回られた。ですけど、これ、先ほど伊藤先生ともお話ししてたんですけど、金森通倫さんの『回想録』が残ってるんですね。この金森さんは明治19年に同志社に、岡山の教会から帰ってこられて、そして、22年ですから、3年後なんですけど、もともと帰ってくる時は牧師さんでしたから、金森さんはその当時、「もうそういった時間のかかることはやるなよ」という約束で帰ってきたと書いてます。ですけど、新島先生が体を壊されたということで、募金のときはお2人、うか、金森さん、ずっと、自分、付いていったと書いてます。でも、そういうことは一切出てきません。

それで、金森さんが新島先生からもらった手紙というのは、もうものすごく膨大にあると。だけど、残念ながら、それは何か、家の者の不注意か何かで燃やしてしまったと。ということで、一切、隠れてます。その辺のところ

大変勉強になりました。

主に私は大越会員と伊藤会員にご質問をいたしたいと思っております。それは、大越会員は「新島襄の私立大学構想」ということでご発表になりましたし、また、伊藤会員は「『同志社大学設立の旨意』を読む」ということでご発表になりましたが、私は新島襄の大学構想はアメリカ、とりわけニューイングランド、それから1年余り、岩倉ミッションと一緒に回りましたヨーロッパで得た大学の必要性、近代国家をつくり上げる上で、大学がいかに重要であるかを認識して、そして、日本にそれを持ち帰って、近代国家を形成する上で私立の大学をつくろうとしたのではないかと考えております。

そこで、お尋ねしたいことは、大越会員あるいは伊藤会員に対して、お二方のご発表の中に、新島の大学構想の背景にあるアメリカの、あるいはヨーロッパも含めての民主主義、あるいはキリスト教にお触れにならなかったように私は聞いておりますが、なぜなのか。今からでもお触れになるのか。そのあたりをお尋ねいたしたいと思えます。以上です。

本井：まず大越さんから。



大越：A先生、どうもありがとうございます。私も今、A先生がおっしゃったとおり、全くそのとおり、アメリカでの大学経験、それから岩倉使節団での大学、アメリカおよびヨーロッパの大学の体験から、もうそのこと自体から大学をつくりたいというふうにな新島が構想したと思っております。その中にはもちろんキリスト教であったり、欧米文化のキリスト教であったり、民主主義というのが、彼自身がもう、当時の日本人としてはもう希少な体験をされて、それが自分として、こういう大学をつくりたいというふう思ったと考えておりますので、意図的に触れてないわけではなく、もし抜けてしまったら、そのとおりでございます。以上でございます。

本井：じゃ、伊藤先生。

伊藤：民主主義という言葉には意識してなかったんですけど、民立とか私立大学をつくるというところで、官立のものに対して私立というときに必ずや



民主主義的な意識は入っていたと思います。

キリスト教に関しましては、やはり物質文明に対して、西洋文明のむしろ精神を取るという言い方の中で、キリスト教主義がその1つであるという言い方で取り入れていたと思います。

本井：A先生、どうぞ。

A：今、おっしゃいましたことは、先ほどのご報告の中におっしゃいましたでしょうか。

伊藤：私は言ったつもりだったんですけど、「キリスト教主義と大学」という5ページ、6ページの黒丸の1つ目、2つ目のところで。

A：そうですね。私は新島襄の大学構想を日本で明治初期に実現するには、やはり民主主義、あるいはキリスト教を抜きにしては考えられない、実現できないと考えておりますので、とりわけその問題についてご発表になったお二方にお尋ねしたわけでございます。

本井：大越さん、付け加えることがありますか。

大越：もうないです。

本井：そうですね。じゃ、別のものに移ります。どうぞ。後ろからマイクが来ますので、お使いください。

B：今日は非常に貴重なお話、ありがとうございます。坂本先生と森先生にお伺いしたいんですけど、まず坂本先生には、新島八重夫人は明治4年に京都へ来て、兄さんの山本覚馬から英語とキリスト教に取り組むようにということから英語と聖書を手掛けられて、明治9年1月、結婚式の前日に洗礼を受けられたんですね。

ところが、同志社女学校のスタートの時点から女学校にもタッチされてたんですけれども、30歳を過ぎてから洗礼をされたということもあって、婦人宣教師とはニュアンスというか、認識の仕方において非常に違いがあったんじゃないかなと。

それで、晩年はあれですね。お茶に専念して、建仁寺の和尚とも非常に親交されて、建仁寺の和尚からけさを贈られて、それを受け取ったと。それ

で、新聞にはキリスト教を捨てたと、棄教したと。教会にもあんまり行っていなかったということで、キリスト教から離れたんじゃないかなということですね。その辺について、先生の感じられたことをお伺いしたいと思います。

森先生には、理化学学校については加藤延年先生が、予科、それから高商、女子部、中学の教壇で生物学や、標本学なんかの教壇に立たれたんですけどもね。生前中、約 8,000 点に及ぶ動物の標本を残されていますね。それが、そのうちには絶滅したチョウセントラとかチョウセンオオカミの標本もありました。これについては最近、韓国は日本に戦前、略奪された文化財の追跡調査と返還展開、こういうこととして、同志社にそれを返還じゃなしに譲渡してくれないかという申し入れをしたらしいんです。同志社としては略奪品ではないので、それに応じることはできないんですけどもね。

加藤先生が何でそれだけのことをされたかという、理化学学校を卒業はされてないんですけども、在学はされたんです。それは海老名弾正がやっていた学校の先生をやって、内地留学ということで理化学学校に来られたんですけども、その学校がもう財政難で、途中で中退されたわけです。そのときに理化学科には鉄鉱石や鉱物の標本はものすごく豊富だけれども、動物の標本が全くないということから、それだけの標本を収集されたらしいんですね。その根底にあるのは何かというと、理化学学校で在学された、いうこともあって、これを何とかして理系の総合学園にしたいという、そういう思いがあったんじゃないかと思うんです。そういうことについて、ちょっとお伺いしたいと思うんです。よろしくお願いします。

本井：じゃ、坂本先生。



坂本：私、八重さんの信仰に関して、とやかく言ってるのでは全然ございません。いろんな信仰の在り方があっていいと思いますし、袈裟をもらったからどうこうというふうにも思わないし、それぞれだと思います。

ただ、女学校との関わりで、女学校の教育という部分ではあんまり関わりがなかったんじゃないかということを申し上げているのです。クリスチ

ヤンとしての八重さんに関しては、会場にいらっしやる山下智子先生は、彼女の信仰は亡くなるまでしっかりしたものだだったということを書いてらっしゃいますし、私も彼女の信仰がどうのこうのということ言うつもりはありません、ということでもよろしいでしょうか。

本井：では、森先生。



森：あまり詳しくは、僕は知らないんですけども、書物読ませていただいたとき、加藤延年先生は非常に苦勞して、標本、集められたということは、文書読んで、すごいなと思っています。ほんで、実際、同志社高校の方に残っているのを見て、よくこれだけ集めはったなというふうに感心していました。

加藤先生がどう思っておられたかは分かりませんが、理科系の範囲をもっとやっぱり広げたんだらうなということは新島の中にはあったと。下村なんかにもあったと思いますし、そのあたりは加藤先生がその講義の中で受け継いでおられるのかもしれないね。でも、それは確認したわけではないので、そういう思いがあってもおかしくはないと思います。

本井：よろしいでしょうか。はい、Cさん。

C：Cです。伊藤先生にお聞きしたいと思います。レジメの1番のところに「新島襄は大学設立をいつ、なぜ考え始めたか」というところで、なぜというのはたぶん、僕なりに新島襄が岩倉使節団でイギリスをぐるっと回って、ケンブリッジとか、グラスゴー大学とか、エジンバラとか、いろいろずっと見て、当然、そういう立派な大学を見て、自分も将来はそういうのをつくりたいなと思っただろうと僕なりに思います。

質問のいつということなんです。実は新島襄の足跡をたどるということで、いろんなところを歩いているのですが、今年4月に吉野の山林を土倉庄三郎のふるさとを訪ねて行ったのです。そのときにいろいろ、新島書簡など見ながら、新島先生は土倉庄三郎の子どもを同志社に託す。その中で、5,000円を寄付したい。できるならば、法学といますか、そういうのをつくって

ほしいというところです。5,000円というのは、ちょうどそのときは1ドル1円ですから、ラットランドで5,000ドルの寄付があったということで、それに匹敵するぐらい、非常に大きなお金をということです。たぶん、これがもらえるのだったら、そのような立派な大学をつくりたいなという思いがむらむらむらっと、具体的にしてきたのではないかな、というふうに思います。

それで、先生の説明の中で、いつというのが、一番上に明治14年10月中旬に土倉庄三郎、古沢滋が新島宅を訪問して、その中に、2段目のところに「同志社ニ於テ計画アル事ヲ談セシカバ土倉之ヲ賛成シ」というところがあります。ここは、説明されたかも分かりませんが、たぶん、このような土倉庄三郎との出会い、またそのような3,000円の寄付というようなのは、この新島の大学設立、むらむらむらっと来たのではないかなと思うんですけども、伊藤先生、いかがでしょうか。

伊藤：そのとおりじゃないかと思います。できれば大学までつくりたいなという夢のようなものはおそらく非常に早い時期から持っていたと思います。いよいよ具体的なことを熱を入れて語って見たところ、賛同者が出てきたというところで、具体的な第一歩が始まったというのがこの14年の秋くらいからで、そして1年後には、その企画案を提出してみたという順序になるんだらうと思います。

C：ありがとうございます。

本井：よろしいですか。

C：はい。

本井：ちなみに土倉さんと一緒に古沢さんが来ておりますけど、この古沢に実は新島は最初に設立募金書を書かそうとしたんですね。書いてもらえなかったのでしょうか。半年後、自分で書いたのが、今日、何回も出てますけども、最初の旨意書です。きっと、振られたんですね。

他にございませんでしょうか。**D**先生。

D：女子大の教員のDです。伊藤先生と坂本先生にご質問させていただきたいと思います。

まず伊藤先生の今日、おつくりくださった資料でいいますと、2ページの

ところになります。今日のテーマの設立の旨意の16種類ですか。関連の資料がありますが、加筆者で、徳富蘇峰のことは私も前から何かいろいろと聞いていましたけれども、あと、浜岡光哲とか、新島公義とかいうふうな名前が挙がりますが、こういう人たちが加筆に加わるというか、ということはどうなところから分かるのか。例えば、徳富蘇峰については文体についての研究があったり、あるいは海老名弾正の証言があったりするかと思います。簡単でも結構ですが、浜岡光哲とか新島公義が設立の旨意の原稿の加筆という形で関わっていたことについて、どういうところから分かるのかなどといったことを簡単にでもお教えいただけるとありがたいと思います。以上です。

伊藤：正確にお答えしなければならぬご質問ですけども、忘れてしまいました。確か『全集1』のところになんかの注書きがあります。申し訳ありません。

D：そうですか。じゃ、またその『全集』の方もぜひ参照したいと思います。

その関連として、浜岡光哲が日之出新聞、今の京都新聞につながるとは思いますけど、その印刷の段階をどうこうというのは、ここで先生、ちょっとお書きですけど、それはもう少し言うかどうかというふうなことなのでしょう。どういうレベルでの加筆というか、関わったことというか、どういうふう理解したらいいのかと思って、今、お話も伺い、このレジュメも見ていました。2ページの下の方ですね。

伊藤：それも書いた以上、お答えする義務があるご質問ですけど、本当にちょっと抜け、忘れてしまいました、何かの関連でこれの8番目の英学校始末のところには加筆したのです。それを加筆したという情報は確か残っております。その前のところも加筆した可能性はあるだろうということです。申し訳ありません。

D：また『全集』の注は私の方でも参照しますし、いずれまたご教授いただくことがありましたら、そのように、折にはよろしく願いいたします。

続いてよろしいでしょうか。

本井：はい、どうぞ。

D：坂本先生にお伺いします。この『女学雑誌』の、今日、中心になった資

料ですけれども、音楽会を開催したことが書いてあります。その音楽会の開催だとか、そういったことについては、教会関係の資料などから裏付けるといふか、そんなこともできるのかどうか、お教えいただければと思います。いかがでしょうか。

坂本：すみません。調べておりません。きっと教会関係を調べたら、いつ音楽会をどんな形で新島先生のためにしたかというのが出てくるかと思いますが、もう鵜呑みにして、そのまましか引用しませんでした。また調べてみます¹⁾。

D：ぜひまたお調べになったら教えてください。ありがとうございます。

坂本：はい。それから、もしお許しいただけるなら、発表時に終わりのページまで行けなかった女子の高等教育について、触れる時間をいただけるとありがたいのですが。

本井：最後のページが飛んでますので、補足してください。

坂本：最後の注²⁾なのですが、これは全て宮澤先生が『同志社女学校史の研究』という書物でご発表になっていることのうち関連する箇所をプリントしたものです。今回旨意の中にあつた大学構想と関連していますので、ご紹介したいのです。ただし、旨意発表の時点で、女学校の大学云々はあり得ないことはご説明させていただいたのですが、その後、1903（明治36）年に国の制定した専門学校令によって、1912（明治45）年、同志社女学校が日本中で6番目に同志社女学校専門学部という形で高等教育に関わることになりました。

先ほど1907（明治40）年頃には、同志社女子部には、れんが造りの建物など1つもない貧弱な学校だったとお話ししましたが、1911（明治44）年には、太平洋ウーマンズ・ボードの寄付により女子部最初のれんがの校舍静和館も建っていましたし、その1年後、女学校が専門学部の申請の準備をしていた時期に、ジェームズ夫人と息子アーサーから10万ドルの献金の知らせが来ました。10万ドルという額はハリス理化学館に比べるぐらいの大きな額の献金で、もちろん使い道に関しては、建物だけではなくて、学校の基本金にも使うようにという指定がありました。女学校専門学部が許可されるにあたっては、こういう建物が建つという見込みは、国が女学校に専門学部

設置を認める好条件になったことは言うまでもありません。

プリントの左側の囲みの中に挙げている人名と学校名は、新島の在世中に同志社に在学していた出身者で、女子教育に携わった人々を適宜、拾ってみるという形で、宮澤先生が『女学校史の研究』の中で取り上げておられる箇所です。新島自身は実際に体を動かして女子教育に関わることはできなかったとしても、これほど多くの弟子たちが新島の影響を受けて、女子教育に関わったのは彼の力ではないかということで、宮澤先生がまとめられたものです。

その右側に、専門学校令によって認可された学校名を設立順に書いています。同志社女学校は6番目ということがお分かり頂けると思います。

そしてその下に、同志社大学が女子学生を正規の学生として入学を認めたのは、私学としては最初であったことに関連して記述しておられる箇所を表にしました。このこともぜひ知っておいてほしいことです。

その中で、東北帝大が一番初めだということで、総長澤柳政太郎のコメントとして「東北帝国大学に女子学生を正規の学生として入れるのは決して女子の高等教育を奨励するというわけではないが、女性の入学を拒否する理由もないから」という言葉を挙げておられます。

そういう消極的な感じの受け入れ方に対して、同志社の海老名弾正の場合には、総長に就任したときから早く男女共学を実現したいと願っていました。海老名は「女子のための大学を建てるが一番いい。本当は最も願うところなれども、容易に行われるとも思われないので、次善の打開策は男子の大学に女子の入学を許すこと」と言っています。要するに、積極的に女子も男子と同じように学ぶべき、という考えの上での女子学生の受け入れであったことが分かります。

表の下段に、証書を2つ並べています。左の方は、同志社女学校英書科が始まったばかりの1883年のもので、小さくて簡略な卒業証書です。それに対して、1892（明治25）年に松浦政泰が同志社女学校の教師になることによって整えられた学制—予備科、普通科、専門科（師範科・文学科）の設置—により、2年後に、専門科の卒業生が初めて出たときの卒業証書が、右側の、文学科の卒業生のものです。それぞれ学科名と教員名も全て羅列してあ

る、とても立派な卒業証書です（ちなみに2枚とも、同志社女子大学史料センターの所蔵）。宮澤先生は松浦政泰の努力により女学校の制度が充実していったことを高く評価しておられますが、それを示す証書です。

それから四半期世紀以上過ぎて、1923（大正12）年、すでに同志社大学が大学令による同志社大学になっていた時の、女専からの入学の特典として、同志社大学進学が挙げられています。同志社女子専門学校にとって、入学したら同志社大学進学への道が開かれている、というのは大きなメリットでした。1923年、まず最初は女学校専門学部英文科卒業生のみを受け入れるという形で認めたのですが、その理由は、同志社女学校専門学部英文科卒業生は「学部入学に関し、予科修了生と同等の学力ある者と認めたるによる」ということで、男子の学校の予科を出た者と女子の専門学校を出た者では学力の面では差はないということを確認した上で、女性の卒業生も入れるということでした。

最初は同志社女学校の英文科だけだったのが、少しずつ増やして行って、やがて神戸女学院とか日本女子大学校とか、学外の女子高等教育機関を加えながら、指定校を13校に増やしていきました。そして1940（昭和15）年には、同志社女専の家政科を含め、かつ全ての指定校制を外して、どの専門学校からでも同志社大学に正規の学生として入学できることになりました。もともとの同志社の持つ自由な考え方が大いに影響しているということ、宮澤先生のご本を引用しつつお伝えしたいと思っていました。さっき時間がなかったんで、できませんでした。今、時間を作ってください感謝です。
本井：ありがとうございます。D先生の先ほどの質問に戻りますけども、浜岡光哲の加筆の件です。『全集』8巻の年表によりますと、この年の4月下旬……。伊藤先生のレジユメでは2ページの6番が問題になってますけども、「4月下旬、これこれを印刷公表する」。次ですね。「上の起草せし趣意書を浜岡氏に託し、これを活版に付し」うんぬんとあるんですね。これが引いてあります。

ただし、浜岡氏に託したのが執筆なのか、印刷なのか。これ見ると、浜岡さんの新聞社に印刷を託したというふうにも取れないこともありませんので、これ以外の証拠が必要かなと思います。一言。他に。

ちょっと待ってください。別の方に当てます。

E：Eです。坂本先生にちょっとお願いしたいんですけども、キリスト教主義ということについてはです。新島の考えてたキリスト教主義というのは、1人1人は大事だとか、良心教育とか、そういうことだったと思います。そういうふうと一緒に考える。よくキリスト教主義というのは、デイヴィスが考えていたキリスト教主義と新島が最初に思ってたキリスト教主義は男女の取り扱いの点で違いがあったと考えていいのか、それともアメリカン・ボードとかそういうところもキリスト教主義といった場合には、新島が言うキリスト教主義と何かダブるのか、微妙に違ってるのか、僕はその辺の理解がうまくできないので、何かうまく説明できているなら、よろしく願います。

坂本：そのご質問に関しては、まず伊勢みやと徳富初の例を挙げて説明させていただきます。2人は熊本洋学校にいたときには、廊下で聞くことが許されていた、ということをよく聞きます。それに対しても、洋学校の生徒たち（代表して聞いたのは海老名弾正）はなぜ女子も同じように学ぶのかと、キャプテン・ジェーンズに詰め寄りました。ジェーンズはあなたのお母さんは女なのか男なのかと質問をし、海老名弾正は引き下がったそうですが、そういう理解の下に、同じ学校の中でも廊下で学んでおりました。その2人が同志社に来たときには、全く男子学生と同じ待遇で、教室で机を並べて学ぶことができました。成績も残ってます。

ですから同志社では、新島と宣教師の考えは、この点では一致していたと言えますし、この時点では熊本洋学校から来た生徒も不平を言ったりはしませんでした。その伝統はずっと受け継がれ、先ほどの海老名弾正総長時代には、他の大学に先駆けて女子学生が共に学ぶ制度をとり入れた通り、同志社のキリスト教では、学生1人ひとりを大切にし男子も女子も対等に扱うということは引き継がれていると言えます。

本井：どなたか。はい。Fさん。マイクを渡してください。

F：Fと申します。何年前前に発言しましたときには、たぶん内容がなかったんだと思うんですけど、「あなたの発言は削除させていただきます」と電話で言われたので、今日は頑張って質問したいと思います。

今日は私が中高時代にお世話になった、山登りのワンダーフォーゲル部でお世話になった、大好きだった先生、森一郎先生に3つ、質問させていただきます。

まず、すごく不勉強で、レベルの低い質問で、また削除になったら困るんですけど。ハリスから10万ドルの寄付があったというふうに伺ったんですが、10万ドルというのは、今のお金にしたらどれぐらいなのかなというのがすごく気になって、家1軒建てるんだったら2,000万から5,000万ぐらいかなと、私だったら庶民的な感覚で思ったのですが、10万ドルは今の何億になるんだろうとか、もし分かったら、教えてください。

それと、ハリスさんは8人、子どもを失ったからこの寄付金をというふうにおっしゃったんですが、子どもを一気に8人失うというのは相当のことがないと起こり得ないことじゃないかと思います。何か事故でもあったのか、病気だったのか、もし何か分かるようでしたら、その亡くなった原因が分かれば、教えていただきたい。

あと、ハリスさんが、けちとは言いませんけど、なかなか寄付をしない、誰にでも寄付するわけではないハリスさんが同志社だからこそと言って、寄付を10万ドルしてくださったのに、結構、あっけなくなくハリス理化学校がなくなっています。その原因はいったいどこにあったのか。なぜそんなに数十年か、何かなくなったのか。たった22人の卒業生でなくなってしまったのかという原因がもし分かれば、教えていただければと思います。よろしく願いいたします。

森：ありがとうございます。今、見ていたんですけど、10万ドルは今に直せばいくらぐらいか。1ドル1円の時代ですから、10万円ですね。当時10万円。

何を根拠に計算するかですけども、その頃のハリス理化学校の授業料と、それから今の同志社大学の工学部の授業料と比較してみたんです。その比率で計算してみると、100億ちょっと超えるぐらいですね。

そのうち実質、理化学校に使ったのは2万5,000ドルだけなんです。だから、30万ドルから、30億か、もうちょっと少ないぐらいですね。あと、7万5,000ドルは全部、基金として置いてあったんです。そのうち、5万ドル

は、日本の公債で、ファンドとして置いたわけです。理化学校のためにという。

ところが、ちょっと今、年代は出てこないんですけども、徴兵制度の問題があって、大学としてファンドをしっかりとってないといけないということで、小崎が社長のときに、その5万ドルを同志社の基金の中に組み込む操作をするわけです。そのために下村孝太郎は怒って、同志社を辞めていくわけです。

そのときに、ハリスは「そういう約束でお金を渡したんじゃない」というふうな手紙を送ってきてるわけですね。そのあたりのうちに、ごたごたしてる間に、ハリスさんは亡くなってしまいました。

あと、2万5,000……。5万ドルは日本の公債ですね。2万5,000ドルはアメリカのハリスの建物にファンドとして置いたわけです。そのファンドからの収入、果実は今も来てます。今も同志社に毎年来てます。だいたい、年によって違いますけど、100万円ぐらいとかファンド。それは特別の、きちっとハリスの奨学金かなにかにそれなりに使われるようになったのです。昔は一緒くたになってたみたいですけど。そういう流れがあります。

F: じゃ、ハリスさんは、理化学校がなくなったこと知らずに亡くなったのですかね。

森: いや、ある間に、ある間に亡くなっておられます。

F: ある間に。だから、「俺がやった100億をつぶしただろう」というふうな批判はされなかったのですか。

森: だから、それはおかしいということで、趣意書の、再度、こうですよというふうな文書、送ってきています。それは新島宛てではなくて、小崎宛てとかで来てるので、それがちょっと今、読んでる最中なんですよ。

F: またお願いします。

森: それから、8人の子どもですね。これは、生まれてすぐに亡くなったとか、いろいろあって、後々、2人やったかな。女性が2人、30歳ぐらいまで生きはるんですけど、そのうちの1人がアボット・アカデミーの卒業生でした。その入学しているときに、新島がフィリップス・アカデミーにいることを見えています。そのことをその娘、ウッドラフという人ですけど、その人は

ハリスに「こんな人いるよ」ということを言っています。ですから、ハリスの手紙の中に「あなたのことはフィリップス・アカデミーにいるときからもう知ってた」と。だから、ずっと前からハリスは新島のことを知ってたみたいです。

それから、あと何でしたかね。

F：なぜつぶれたか。なぜ理化学校がつぶれたか。

森：つぶれたというか。結局、その資金の運用の方法で、理事会側、小崎と、それから下村孝太郎とがぶち当たって、やめて、それでだんだん尻すばみになって、明治30年に閉校という形になったわけですね。

F：残念でした。

森：ただ、10万ドルは非常に多いみたいですが、今回、見てて分かったのですが、国公立の理科系の学部の分野数見てたら、そら10万ドルぐらいでは足らんと思いますね。やっぱり7分野で21講座とか、そういう非常に大きいもんを国立は持ってましたから、だから、そういう意味から見たら、少なかった。

ついでながら、これはもう間違いないと思いますが、卒業生に加藤与五郎という人がいます。フェライトで財をなした人です。その人が思い出話の中で、デイヴィスから、実はハリスは100万ドルを同志社に遺産として遺書の中に書いてたというふうに聞いたと。下村も手紙の中で、ハリスはまだまだ、10万ドルが決まってるときに、まだくれそうですよと。下村の手紙から見ていてね。ところが、そういうごたごたがあったときに、その100万ドルの遺産というのはちゃらになった。どうも初めはうそかいなと思ってたんですけどね。それぐらい……。うまい具合に新島宛ての英文書簡が読めるようになったんで、そういうなんから分かってくるようになったりします。

本井：よろしいですか。

F：ありがとうございます。

本井：待ってください。10万ドルを何に例えるかで違います。ちょうどハリスと同じ時期にクラークができてますね。ハリスは2万5,000ドル以下で建っておりますけれども、クラーク神学館は1万1,500ドルで建っております。つまり10万ドルあれば、クラークが9つ建つんですよ。だから、今、1

個いくらか、計算してみてください。それでだいたい分かると思います。

はい、Gさん。

G: 坂本先生を中心に、教育者の立場の方にお聞きしたいのです。今、あちらこちらで女性の点数が上がり過ぎるから落とそうと。ここは同志社ですので、同志社のことについてお聞きします。

私の息子が同志社中学へ入ったときに、ある人から「息子さんと良かったな」と。「娘さんやったら、受からへんかったかもしれんで」ということを言われたんです。置いておくと、同志社中学がほとんど女子になるというような話が僕の耳に入ってきて、もう53にもなった息子のことをいまだに覚えてるんですが、女性が昔のように優秀でないなら、差別されていっても、今と違って、ある意味、仕方がないんですが、優秀であるのに、女子であるからというのに差別がいまだにあちらこちらであるということに対して、まずは坂本先生、女子の教育者として、その次、他の先生方に、教育者として、そんなことが許されていいのか。

坂本: はい。絶対許されてはならないと思います。先日の東京医大のニュースを見ながら、今でも女性がそんなに差別されていたのかと、ものすごく腹立たしく思いました。

同志社の中学のことは、私には分かりません。全然知らないで、女子がどうのこうのということは中学の関係の先生にお伺いした方がいいかと思います。一般的に考えて、女子の能力が劣るとか、優れているからハードルを設けて差別するとか、そんなことは全くおかしいと思います。逆に昔は、女性が勉強をすると健康上よくないとか言って勉強の機会を与えず、馬鹿扱いしていたことを極めて残念に思います。

G: 先生のご意見として、今後、どうあったら日本も本当の意味の男女平等になるのか、思いがあれば、教えてください。

坂本: 今後どうあったら、ですか。それは、日本の政治がと何か、そういうふうな意味なんでしょうか。

G: いや、先生のご意見。

坂本: はい。私はもちろん男女は対等に扱われるべきと思っていますし、世の中にそういう差別があってはならないと強く考えています。それは、今も

思っていますし、これからはますますそうだと思います。逆に、差別をする人の気が知れないとか、そう思う人がいたら、おかしいんじゃないかって思うぐらい、です。これで、よろしいでしょうか。

G：特に女子の教育について。

本井：Gさん、やめてください。どうぞ。

H：Hです。どうもお世話になります。記憶が定かじゃないんですけど、伊藤先生にお聞きしたいのですが、同志社の大学設立について、新聞各社に相当、同志社が発表されたみたいで、その中の時事新報は、慶應大学との結び付きが非常に強いということをちらっと前に聞いたことがあります。そのために慶應は、同志社が大学を設立することをやってるぞ、ということを時事新報通じて知った。そういうことで、出し抜けに慶應は先に大学になったという話をちらっと聞いたことがあります。もしそれが定かかどうか分からないので、先生のご認識か何かあったら教えていただきたい。

それから、大越先生にアマースト大学のノースカレッジ、新島襄が寄宿してた部屋が8号だとおっしゃったのですが、これ、北垣先生もご存じだし、私もメールで確認したんですけど、部屋は13号だということで、私、アマースト大学から返事をもらってます。併せて、そういうことでお伝えしたいと思います。

伊藤：慶應と同志社でどちらが先に大学になったかというのであれば、慶應の方が先です。でも、それは同志社に刺激されたからだというのは、同志社の人の誇大な推測じゃないでしょうかと、存じます。

それから、設立の旨意が新聞に出たことについては、田中智子先生が非常に詳しい調査をしまして、これ、もう活字になっております。

H：それで時事新報との関わりですね。慶應とのつながりが何かありますか。

伊藤：つながりはないと思いますけども、同志社を意識してたということはあったんだろうと思います。新島が死んだことは記事にしていますけども、設立の旨意について何かコメントしたということは、私、まだ調べておりません、知りません。あったかも、なかったかも分かりません。

本井：大越さん。

大越：すいません。アマースト大学、私、行ってないので、確認された13号というのが正しいのであれば、それが正しいと思います。すみません。

あと、別件ですが、慶應が大学部というのをつくりますが、その開校式が新島の告別式なんですね。われらは、慶應は私学として最初につくったのが大学も最初につくるみたいなことで、新島が亡くなったみたいなことは一切書いてないので、逆に新島を意識してやったんだというふうには私は思っております。

本井：はい。あとお1人。Iさん。

I：大越先生と坂本先生にお伺いしたいんですが、私は、先生方のお話をちょっと遅刻して聞けなかったので、もうすでにご説明されてたら、お許しください。

初期の、設立のときの時間割を見てますと、坂本先生の資料で、3ページの資料で、それぞれ本科でも全て体操というのが、各学年のカリキュラムに組み込まれておりますし、その下の『つぼみ』いうのを見ましても、毎日、運動、遊歩という、かなり体操、体育のところにも力を入れておられる。

それから、大越先生の資料の方を拝見いたしましても、その時間割の中に体操というのが取り入れられております。これ、新島先生の哲学というか、フィロソフィーみたいなものだと思います。具体的にどのような授業、どのようなカリキュラムをされてたのかというのを、もしそのときにお話しされてなかったんだしたら、お教えいただきたい。もしダブっていたのだったら、また後ほどちょっと教えていただきたいと思ひまして、ご質問させていただきました。

坂本：体操のことには、何も触れませんでした。でも、同志社女学校の体操というのは散歩といいますか、例えば4時ぐらいからみんなそろって、ずっと出町の方に歩いていく、ムカデの行列とか、皆さんがうわさするぐらいに有名でした。歩くということをまず全般的にやっていました。

それ以外に、今、何年ごろ、どんな体操をしていた、こんな資料が残っているとかははっきり言えないんですけども、籠球とか、テニスとかという運動はしていました。コート of 図面の記録とかも残っています。

同志社女学校の場合、女性宣教師の考えや経験に基づいて、もともとアメ

リカでやっていたことを取り入れるという傾向があったと思います。それから、先ほど言いました1880年に関しては、同志社英学校のカリキュラムを参考にしたという部分がかかなりあり、共通した、同じような科目であったり、教科書であったりしますので、同志社英学校の方で、新島先生とか、あるいはラーネットの考えでやっていたことの影響もあるかもしれません。ともかく、その当時の日本ではあんまり実施してなかった、重要視してなかったかもしれない体育に対しては、キリスト教系の学校では早くから力を入れてたんじゃないかと思います。

I：テニスの写真は、私も実際、見たことがあります。ラケットを持つてる女学生がなぎなたをしておられる方の後ろの写真を私も見たんです。あれは授業であったのか、クラブ活動、課外活動だったのかという、もしインフォメーションをお持ちだったらと思ったのですけど。

坂本：この、1880年度の、スタークウェザーが書いている時間割を見ますと、授業が終わってから、放課後、課外活動という形で、してたんじゃないかと思いますが、内容に関しては調べておりません。また、『百年史』にある同じ年の1880年学科課程表には、体育のことは記されていませんが、1888年の時間割には、欄外に裁縫・唱歌とともに、体操が記述されています³⁾。

I：ありがとうございます。

本井：大越さん、どうぞ。

大越：私のレジメのところでは、普通学校高等科のレジメで普通兵式とございましたので、書かせていただきました。これはあくまでレジメで、新島が亡くなった後、実際、この高等科はなくなってしまったので、どういものかちょっと存じません。申し訳ございません。

英学校自体はラーネットが教えてたということは、いろんなところに書いてありますが、もし本井先生、お分かりであれば、補足、お願いしたいんです。以上でございます。

I：ありがとうございます。

本井：いや、時間切れです。ありがとうございました。

活発なご質問。5人の報告の方々、ありがとうございました。これにて終

会です。最後に横井代表による閉会宣言をお願いしたいと思います。



横井：ご報告いただきました先生方、それからシンポジウムの司会をしていただきました本井先生、本当にありがとうございました。もう一度、大きな拍手をお願いいたします。本井先生もありがとうございました。

それでは、これをもちまして、2018年度第1部門研究8月一日研究会を終了させていただきます。

注

- 1) 新島の大学設立運動のための慈善音楽会が開かれたのは、1889年3月14・15日の2日間で、発起人は佐々城豊壽と潮田千世、賛成人は湯浅初他9名であったこと、場所は厚生館で、その時の寄付金は収支を差し引いて計103円23銭であったことが判った（『女学雑誌』152, 154号）。しかしその後、募金の収入に対し支出が多かったことをめぐって、同誌上でかなり手厳しい批判があり、それに対する佐々城豊壽の反論が2号にわたって掲載されている（164, 165号）。
- 3) 秦芳江「同志社女子部の正課体育と課外体育の歴史（明治編）」（同志社女子大学『学術研究年報』35巻III 1984）によると、同志社女学校では、明治10年代すでに「体育」はカリキュラムの上で「正課」と位置付けられていたこと、ただし時間割の表では、他の一般教科とは別に、枠外に表記されていたことが記されている。欄外に書かれているので課外活動だろうと説明したのは坂本の間違い。内容は主として遊歩運動であったが、クロッケーやテニス、バスケットなども行われていた。

なお質問者の言及された写真に関しては、秦氏により明治28年頃か？とコメントされている（『学術研究年報』15巻1964）が、明治期同志社女子部の体育の特色の一項目に、「欧米人女子宣教師によって、直輸入というかたちで新しい体育方法、運動用具が紹介されていること。しかし、それと同時になぎなたなどの日本の伝統武芸も、それら外人女子宣教師らも混えて教授されていたこと」が挙げられている。（その他、秦氏による明治期のキリスト教主義女子体育、社会体育、新島先生と体育など、多数の文献あり）

2)

新島豊の在世中に同志社に在学した出身者で女子教育に携わった人びとを適宜括弧をつけてみる。

吉田作弥(神戸女学院、原田助(神戸女学院、富川経輝(同志社女学校、梅花女学校、加藤勇次郎(同志社女学校、松浦政泰(同志社女学校、日本女子大学校)、山中西(梅花女学校、同志社女学校、三宅善毅(梅花女学校、湯谷謙一郎(同志社女学校、横浜共立女学校、フェリス女学校、青柳有美(明治女学校、磯谷雪峰(明治女学校、同志社女学校、金城女学校、麻生正蔵(梅花女学校、日本女子大学校、村田勤(日本女子大学校、村井知至(日本女子大学校、網島佳吉(日本女子大学校、塘茂太郎(日本女子大学校、不蔵唯一郎(前橋共愛女学校、須田明恵(同志社女学校、杉田淵(前橋共愛女学校、堀真一(前橋共愛女学校、新潟女学校、柏木義巳(前橋共愛女学校、林外浪(同志社女学校、東京女子高等師範学校、瀧沢龍聖(淑明女学校、吉田清太郎(松山女学校、三輪源造(松山女学校、松田道(同志社女学校、中島未治(同志社女学校、二宮謙兵(神戸女学院、松山東雲学園、田中五子(熊本女学校、加藤優子(鹿児島女学校、竹内梅子(明治女学校、中山咲子(岩代松山女学校、浜田知穂子(香南女学校、東京女学院、ほか。

その後でも、清水安三(崇貞女学校、伊藤菊次郎(共愛女学校、梅花女学校、高麗京(梨花女子専門学校、ソウル女子大学校、周真隣(前橋共愛女学校、大橋広(日本女子大学)らが、思いのほか、

宮澤正典『同志社女学校史の研究』思文閣出版(2011) 17頁

1903年 専門学校令公布

専門学校令による女子の学校

- ① 1904年2月 日本女子大学校
- ② 1904年3月 津田英学塾
- ③ " " 青山学院女子専門部
- ④ 1909年10月 神戸女学院専門部
- ⑤ " 11月 帝国女子専門学校
- ⑥ 1912年2月 同志社女学校専門学部
(1930年に同志社女子専門学校に改称)
- ⑦ " 3月 東京女子医学専門学校
- ⑧ 1915年3月 聖心女子学院高等専門学校
- ⑨ 1918年3月 東京女子大学
- ⑩ 1919年3月 活水女子専門学校

女子を大学に正規の学生として入学させた大学

- ① 1913年 東北帝国大学理科大学
- ② 1923年 同志社大学
- ③ 1925年 九州帝国大学(法文・農)
- ④ 1929年 東京、広島文理科大学
- ⑤ 1930年 台北帝国大学(文政・理農)
- ⑥ 1931年 明治大学
- ⑦ 1933年 東洋大学
- ⑧ 1934年 法政大学(法文・文政)
- ⑨ 1935年 大阪帝国大学
- ⑩ 1938年 関西学院大学

『同志社女学校史の研究』116-144頁



英書科第1回卒業生1883年2名の内、田代初の卒業証書



専門科(文学科)第1回卒業生1894年2名の内、林徳の卒業証書